

就職問題の現状と将来

—社会への貢献度という視点から広大を眺めると—

六月二十一日に、広大生の就職問題の現状と将来について学長インタビューを行った。聞き手は、早川副委員長と安藤広報委員。

広報委員 〓 本日は、多くの学生が興味を持って「就職」に関して、学長の意見をお伺いします。

学長 〓 大学では、企業が求める学生に對しても、大学のネットワークでなく実際に役立つ人材を欲している、とマスメディアでいわれておりますが、広大の現状はいかがでしょう？

卒業生が社会でどれだけ役立っているかで見ると、私も学生の就職問題は非常に大事だと考えている。

四月十二日には中国新聞社主催で中国地区の「企業ガイド」が行われた。このガイドは、大学と企業との情報交換の場であり、企業からの求人情報や大学への要望などが話された。毎年本学の卒業生が多数就職している広島地区の企業でも、今や全国各地から応募があり、本学の学生も厳しい状況にある。

就職相談などの就職体制の充実につ



自分で自分を処理できるような人材をつくることが重要

いては、今後一層重要性を増してくると思われる。本学では、学生の就職に關して学生部の厚生課厚生係で担当していたが、平成五年より就職担当の専門職員制度を導入した。しかし、就業体制のいっそうの充実のためには、就職専門の組織をつくり、積極的対応が必要であると考えている。

教育面でも、他大学、特に私立大学と比較して、本学は入学した学生への就職指導、いわゆる出口でのケアが弱いように思う。大学の教官も、学生を教えつばなしにするのではなく、もう少し手を加え付加価値を付けて、社会に役立つ人材に育てる努力をする必要がある。

また、同窓会連合会にも期待している。名古屋大学では、卒業生と企業に対して、卒業生がどのように企業に役立っているかというアンケート調査を行い、自己点検評価の項目に加えている。本学でも卒業生の追跡調査など一層のアプターケアーが必要である。

学部教育で学生の付加価値を高めるために、どのようなことをお考えですか？

日本の社会では「ライセンス」が重

要視されるので、学部学生が卒業前に何らかのライセンスを取れるようにバックアップすることも、一つの方法だと考えられる。

しかし、一番重要な点は、今回の本誌の特集にも取り上げてもらったが、学部教育の改革の中の教養的教育の充実だと思っている。

就職の選択という問題は、すこぶる個人的な問題だが、学生のさまざまなニーズに応え、社会に有為な人材を供給するということは、大学の使命の一つでもある。そのためには、繰り返しになるが、すべての教官が教養的教育を担当することにより、全学を挙げた教養的教育の推進が重要だと考えている。**社会に役立つ人材とは、具体的にどのような学生を指すのでしょうか？**

最近の学生は指示されたことはきちんとやるが、自分から問題を解決することは苦手である。しかし自分で方針を決め、解決できるような学生を社会が必要としている。

結論的に言えば、自分で自分を処理できるような人材をつくるのが重要であり、今までのようなどちらかという知識偏重ではなく、社会の多様な情勢に複眼的思考で対処できる人材であり、社会にウェルカムな人材をつくりたいということである。